

# 古文獻にあらわれる羽前国・置賜郡——他国からのまなざし——

石黒 吉次郎

専修大学文学部教授

## 一 はじめに

出羽の国の一部であった羽前国（山形県）と米沢を中心とする置賜郡が、京都・江戸を中心とした他国からどのような知られていたかを述べるのが本稿の目的である。限定された地域であるが、中央から遠い辺鄙な場所がどのように中央の文化と関わるかの一例としての考察である。明治元年に出羽国は羽前（山形県）・羽後（秋田県）に二分され、その後置賜郡も西置賜・東置賜・南置賜の三郡に分割された。

「置賜」の地名が見えるのは『続日本紀』で、和銅五年（七二二）九月二十三日に始めて出羽国が置かれたとし、さらに同年十月一日に「陸奥国最上・置賜おきたみの二郡を割きて出羽国に隸く。」とあり、靈龜二年（七一六）九月二十三日には、

従三位中納言巨勢朝臣万呂言さく、「出羽国を建てて、已に数年を経れども、吏民少く稀にして、狄徒馴れず。その地膏腴にして、田野広寛なり。請はくは、随近すゐこんの国の民をして出羽国に遷らしめ、狂狄を教諭して、兼ねて地の利を保たしめむことを」とまうす。これを許す。因て陸奥の置賜おきたみ・最上の二郡と、信濃・上野・越前・越後の四国の百姓はくせい各百戸を以て、出羽国に隸かしむ。(原漢文)

とある。この本文は新日本古典文学大系本(岩波書店)に拠るもので、置賜をオキタミと訓じているが、『和名抄』国郡部では、「置賜―於伊太三オイトサミ」とする。置賜は「置民」の転じたものであろうか。

以後平安時代の出羽の国の状況では、元慶二年(八七八)の元慶の乱があった。出羽の俘囚が秋田城司の暴政に對して反乱を起こしたものであった。三善清行の『藤原保則伝』は、藤原保則が出羽権守となつてこの乱を鎮圧したことを記す。『国司補任』には、出羽国の国司についての記事は少ないが、藤原仲成、平維茂、源義家、藤原季仲などの名が見える。宗教の面では、天台宗の僧鎮源による『法華験記』(成立長久年間Ⅱ一〇四〇～四四年)卷上・八話に、

沙門妙達は、出羽国田川郡布山竜華寺の住僧なり。和尚心行清浄にして、染着するところなし。：妙達和尚死して七日を選て蘇生よみがり已りて、始めて冥途の作法、閻王の所説を語りぬ。(原漢文)

とあり、法華經持經者の蘇生譚を伝える。これは『今昔物語集』卷十三・十三話にも取られている。三好為康『拾遺往生伝』(天永二年Ⅱ一一年頃)卷上・四話には、

延暦寺の座主内供奉安恵は、俗称大狛氏、河内国大泉郡の人なり。…承和十一年（八四四）出羽の講師となり、山を出でて任に赴けり。この時郡内の道俗、一に法相宗を学びて、天台宗を知らず。安恵境に入りてより以降、皆法相宗を廢てて、改めて天台宗に帰せしめつ。

とあり、天台宗の出羽国における布教のさまが知られる。出羽国は海上交通で京都に近い海側が中央の文化の影響を受けて発達していったのであろう。置賜地方にも古墳文化があったようであるが、ここではその問題までには取り上げないことにする。当時海側の田川郡は湯殿山の勢力下にあつたようである。このほか『大和物語』第十七段には宇多天皇の皇子式部卿宮に仕えた出羽の御なる女房が見える。また出羽弁は著名な歌人で、『出羽弁集』という家集がある。出羽守平季信の娘であつた。

中世に下つて、源義経の一代記をフィクションを混ぜて記す室町時代の『義経記』では、巻七に義経の都落ちの話があるが、北陸の物語がほとんどで、出羽は少ない。出羽の話としては、庄内地方の豪族に田川次郎真房の子が病氣となり、弁慶が折つて治したとある。

また義経の北の方が亀割山でお産をするが、これは山形県最上郡と新庄市の境にあり、山伏修験道の山であつた。

出羽三山も海側の文化の拠点の一つで、羽黒山伏の活動は文学の上では室町時代に顕著になる。能では現行曲の「葛城」「撰待」「野守」に出羽の羽黒山より出でたる客僧が登場する。狂言でも山伏狂言「腰折」（現行曲）・「継子」（番外曲）に羽黒山の山伏が登場する。

## 二 和歌文学と出羽―羽前を中心に―

地方の状況は文学的には古代の中央においては、歌枕（和歌に詠みこまれる諸国の名所）として認識された。これは東北にも及ぶが、十四世紀初頭の『歌枕名寄』、南北朝時代の『新撰歌枕名寄』では、出羽の歌枕は貧弱で、後者の例では象潟・阿保関・奈曾白橋・平鹿などがあり、著名なものはあげられていないようである。そこで片桐洋一『歌枕歌ことば辞典・増補版』（笠間書院）によって示すと、阿古屋松・象潟・袖浦・最上川の四例となる。

これは同書があげている陸奥の歌枕―安積沼・浅香山・安達原・会津山・阿武隈川・阿武隈松・浮島等々の三十五例と較べると、圧倒的に少ない数になる。やはり太平洋側の陸奥の国が多賀城などを有する大きな街道があり、こちらの方が人の往来が多かったのであろう。この出羽国歌枕の四例が何故先の歌枕関係二著に漏れてしまったのかは不明であるが、出羽国に関する関心が薄かったことによるであろう。

阿古屋松は『堀河百首』（長治二〜三年 一一〇五〜〇六年）に藤原顕仲の和歌に

おぼつかないざいにしへのこと問はむあこやの松に物語して

とあるが、この顕仲は陸奥守基家の養子となった人物である。阿古屋松は歌人藤原実方との関わりの説話が有名で、『古事談』巻二・『平家物語』巻二・世阿弥の能「阿古屋松」で知られる。今『古事談』によって記すと、一条天皇の時代、実方は藤原行成と殿上で口論し、無礼を働いたため「歌枕みてまゐれ」と陸奥に左遷となった。実方は歌

枕の阿古屋松を採し歩き、老翁にこれは陸奥ではなく出羽の国にあると教えられる。その時老人は、「みちのくのあこやの松にこがくれていづべき月のいでやらぬかな」の古歌をあげる。この歌は『夫木和歌抄』巻二十九・松にも見える。先にあげた『歌枕歌ことば辞典・増補版』によれば、阿古屋松は山形市内の東部にある千歳山のこととしており、現地でもそのように理解され、あこや町なる地名もある。そうした認識は近世初期にまでさかのぼる。秋田雄勝の人戸部正直による『奥羽永慶軍記』（元禄十一年＝一六九八年の序文）では、巻三十七・狂歌の事に、

政宗の外舅義光の在城山形に千年山とて名所あり。その峯に阿古屋の松の旧跡あり。政宗十五歳の秋、義光の許に詠みて送る。  
恋しさは秋ぞまされる千とせ山阿古屋の松に木隠れの月<sup>(4)</sup>

これは『古事談』よりは『平家物語』によつて、「みちのくのあこやの松に」の歌を踏まえたのであろう。なお『奥羽永慶軍記』は永祿から慶長年間に至る奥羽の諸合戦の記事である。ところが阿古屋の松はこのほかに庄内の狩川にもあるという。三河の人菅江真澄の『あきたのかりね』の天明四年（一七八四）九月二十一日の条に、

（東田川郡の）瀬川、三ヶ沢、添津、山崎、荻河、かゝるところを過来れば、阿古屋稲荷と華表とりいに名のりたる前にぬかづく人あり。いかなる神にておまし奉るといへば、このところこそ、みちのおくに名だかきあこやの松にて侍れ。いにしへもこ、もみちのおくに、今は出羽とぞなりぬ。<sup>(5)</sup>

とあつて、狩川の阿古屋の松を訪れたことが見える。清河八郎の紀行文『西遊草』安政二年（一八五五）九月五日

の条に、山形の千歳山に阿古屋の松の旧跡を見て、庄内狩川にも阿古屋の松があるが、これはどうしたことだろうと述べている。狩川のものには、都の女阿古屋がこの地にやってきて炭焼き藤五の嫁となった。阿古屋が地に突き刺した松の枝が立派な木に成長したという伝説がある。<sup>(6)</sup> なお南北朝時代の歌人宗久の紀行文『都のつと』に出羽の阿古屋松を見たとあるが、具体的な場所は記されていない。

袖浦は『歌枕歌ことば辞典・増補版』によると、酒田市宮浦のことで、「白妙の袖の浦波よるよるはもろこし舟や漕ぎ渡るらむ」(『拾遺愚草』)の例などをあげている。最上川は急流として有名な歌枕で、『古今和歌集』の東歌「最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」などで知られる。飛鳥井雅有の『最上の河路』はこの『古今集』の歌にちなんだ日記で、文永六年(一二六九)の冬の頃の記事のようで、逢坂から鎌倉までの道中に詠んだ歌が中心となっている。本の題については、冒頭に、

れいのかれたるみは、しづのをだまきくり返しつゝ、のぼればくだるに、あふさかにて、

あふ坂の山の杉村すぎがてに関のあなたぞやがて恋しき<sup>(7)</sup>

とあり、交通の要衝であった逢坂の関で、自分が何度もここを往復したことを思い、その「のぼればくだる」が『古今集』の「最上川のぼればくだる」の歌を思わせるものであったからであろう。

### 三 『奥羽永慶軍記』の置賜記事

室町・戦国時代の羽前の記事は、中央の文献では『看聞日記』には陸奥の南部氏の動向が見えたりするが、特に羽前の記事はない。『伊達正統世次考』巻八上・植宗公・一（第二期戦国史料叢書一―所収）に、永正十年（一五一三）六月二十六日、判書を湯村助十郎に与えた。内容は桑折こおり五郎方より出羽国置民郷北条金原郷内の土地を購入した、西大枝宗保より下長井莊玉庭郷内の土地を購入した等のある（南陽市に当たる北条郷については、『南陽市史』上巻・中巻参照）。このような領地に関する記事が多い。伊達氏による置賜地方の支配は関ヶ原の合戦後に終り、上杉氏が会津から米沢に入部した。『上杉家御年譜』三・景勝公（米沢温故会編）には、慶長六年（一六〇一）八月下旬、岩井・水原すいばら・安田の三士が米沢に越山し、屋鋪・諸町すいばら・在家等を点検した。十月十日景勝は豊臣秀頼から帰郷の許しを得たことを徳川家康から伝えられて、二十八日に米沢に着府したとある。この頃の上杉氏は中央に目がゆきがちで、領内に関する記事は見えない。

戦国時代の置賜郡における諸事件は、先の『奥羽永慶軍記』から拾うことができる。以下、箇条書きに述べる。

- 1 巻一・永禄八年檜原合戦ノ事、同九年檜原合戦ノ事  
永禄八年（一五六五）と九年長井方と会津の蘆名氏との間で合戦があった。米沢と会津の境をめぐる檜原での合戦であった。

#### 2 巻五・柏山合戦、輝旨内室来三陣中二事

上野山の住人右馬頭満兼は勇士で最上家の姻戚であったが、義光に敵対し、妻の姪が米沢の伊達輝宗に嫁してい

たので、輝宗と組んで義光と合戦に及んだ。輝宗の妻が陣中にやって来て、父最上義守の教訓を引いてかき口説き、兄の義光にも申し入れて合戦をやめさせた。

3 卷七・伊達政宗家督ノ事

伊達氏は藤原氏の一族で、もとは伊達信夫に居住していたが、植宗、晴宗と続き、輝宗に至って米沢の館山に城を築いて住んだ。その子政宗は文武両道に優れ、家督を継いだ。

4 卷七・大内備前守以謀降米沢事

四本松にいた大内備前守は、伊達を攻略するために米沢へやって来て、政宗に臣従して様子をうかがった。しかし政宗が賢明であるために家臣の切り崩しができず、天正十三年（一五八五）妻子を連れてくるからと暇を乞い、会津の蘆名氏と相談した。会津側は危機を感じ、米沢との境檜原の防衛を強固にした。

当時政宗は多くの敵を相手にしていたらしい。「そもそも天正年中には、奥羽ごとごとく乱れ、米沢にても政宗諸方の敵に攻められ」（卷十一・長井・泉田、大崎の為に人質に取られる事）とある。

5 卷十三・鮎貝落城、并政宗、大崎発向ノ事

天正十五年政宗は鮎貝藤太郎が従わないのでこれを攻めた。鮎貝は館に火をかけて、白昼手勢とともに中山を越え、上野山を通って最上義光のもとに身を寄せた。これで政宗と義光はますます不仲となった。その後政宗は陸前の大崎氏を攻略するために発向した。これを聞いた義光は笹谷の宿で政宗軍を待ち受けたが、政宗はこれはずしで進軍した。政宗に敵対する一ツ栗兵部は政宗に狂歌を送った。

政宗ヲ木葉猿カトオモヒシニ一ツ栗ハ落サ、リケリ

政宗も返した。



ヨソノミミレハ木ノ間ノ一ツ栗終ニハ猿ノ餌食成ヘシ

一ツ栗は大崎氏にも離反したことがあり、鳴子を越えて山形にやって来て、義光に属した。政宗は今回も大崎氏を攻め落とすことができなかつた。

鮎貝氏は『長井市史』第一巻によると、藤原北家流という。また『奥羽永慶軍記』には武家の狂歌のことがよく見える。合戦の間の息抜き、冗談として詠まれているらしい。この時期の狂歌の流行が知られる。一方政宗は歌人としても知られていた。越後の豪雪地帯である塩沢の人鈴木牧之は、その『北越雪譜』（十九世紀前半に出版）の中で、伊達政宗は高名な歌仙であるとし、その雪の歌を二首あげている（二編・巻二・芭蕉翁が遺墨）。また小和田哲男氏の『戦国大名と読書』（柏書房、平成二十六年）によれば、戦国大名の教養として、武芸・漢籍・和歌・連歌・狂歌・茶道があげられており、これらは『奥羽永慶軍記』にも見えることがある。『奥羽永慶軍記』は政宗に対しては称賛的で、「政宗事、世ニハ鬼神ノヤウニ沙汰シ候へ共、其仁心モアル弓取也」（巻二十・箭田野義正、政宗に降る事）と褒めている。

#### 6 卷二十一・蒲生・伊達、攻三大崎一揆事

奥羽各地で一揆が起こり、政宗も（政宗は蘆名氏を滅ぼした後、会津を領した）蒲生氏郷とともに大崎一揆の鎮圧に当たった。政宗の陣に氏郷がやって来た。政宗は風流人で数寄屋を造り、濃茶で氏郷を丁重にもてなした。しかし氏郷は内心政宗に討たれるのではないかと疑っていた。一揆の鎮圧でも両者は噛み合わなかつた。

#### 7 卷三十一・最上畑屋、落城事

会津の上杉景勝（慶長三年移封となり、会津に入部した）と山形の最上義光は最初協調関係にあったが、米沢をめぐる両者は対立した。景勝は山形攻略を思い立ち、家臣の直江兼統等を動員した。会津勢は長井で軍勢を揃え、

米沢口にあつた最上方の畑屋城を攻めて落城させた。

8 卷三十一・長谷堂合戦、付さげのふ鮭登働事

前項に続いて上杉方は最上方を攻めて、長谷堂の城に進軍して山形に迫つた。結局上杉方は攻め落とせず、米沢に退却した。最上方の武将鮭登越前守茂綱父子（『平家物語』で有名な佐々木四郎高綱の子孫という）の活躍が目立ち、上杉方も感心して直江兼統を通して褒美を与えた。

この戦いの叙述では、山形の庶民の動向が印象的である。

山形ノ町人等ハ、会津勢モハヤ上ノ山・長谷堂ヲ攻メ破リ、山形ニ乱入ストイフモアレハ、イヤトヨ明々日押寄ルナト、取々ニイフ程コソアレ、手ニ々々財宝ヲ持運ヒ、売物ヲカツキツレテ、或ハ東根ノ幽谷、山寺ノ深山ニ忍フモアリ。或ハ老人ノ手ヲ引、腰ヲ押、女童ヲ肩ニ掛ケ、引列ノ山々ノ奥ヲ求メテ逃行ハ、軍兵トモ弥憫レ果タル風情也。

9 卷三十二・上ノ山合戦、会津勢敗軍の事、長谷堂口会津勢敗軍の事

前項に引き続き、上杉勢は最上勢に敗れ、直江兼統は長井に帰陣した。義光は「直江は古今無双の兵なり」と感心した。

これらは慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いの山形版で、上杉と徳川は対立し、最上の後ろには徳川方がいた。

10 卷三十六・上杉景勝訴訟事

景勝は関ヶ原の戦いで石田三成に味方したため、敗軍側になってしまった。今はいかんともし難く、直江兼統に命じて、秀康（秀忠の兄）の口添えを得て、徳川家康に恭順を願ひ出た。家康が会津領を召上げたため、景勝は米

沢に移った。

『奥羽永慶軍記』の著者は、勝れた武将には好意的で、政宗も直統もその対象であった。景勝に対しては多少評価が劣るようである。卷三十八には不思議な話を載せている。すなわち景勝は武田信玄の娘菊の前を正妻としていたが、もともと女嫌いで美少年好みであったため、兼続が京都で遊女を買い上げて男に仕立て、景勝に近づかせて男子を産ませたという。これは巷間の噂を取り上げたものであろう。

#### 四 近世の諸国話から

地方の出来事は諸国の話として近世文学に多く見られるが、諸国話は古く『日本靈異記』あたりに淵源があり、鎌倉時代の無住の『沙石集』にもそうした面がある。他国の人の目から見た出羽として、まず戦国時代に成立したという『人国記』出羽国を見てみよう。

出羽の国の風俗は、奥州に大体替らざるなり。然れども奥州の風儀よりは律儀なる所ありて、智も亦上なり。武士は我が主・親へ忠孝の志あり。下を使ふの法を沙汰し、下臈は上をうやまふ心あり。百姓は地頭を頼む心入れありて、他の村郷の者、我が地頭を諍るを聞きては、則ち勝負を付くるの類にて、寔に頼もしく、しをらしくこれ有るところ多くあるなり。

蓋し此の国の者、都て吾が国は遠国・偏土にして、かたくへなき国風なる故、恥づかしきなどと云ふ風俗なり。これに因つて奥・出両国の者は、四民ともに礼厚（と）きなり。

出羽の人達は陸奥よりは律儀で知恵があり、主人思いでもあるという。また田舎風を恥じて、かえって礼儀正しいともある。これについては佐藤成裕（中陵と号す）の『中陵漫録』巻六・奥州の人風（序文・文政九年＝一八二六年）でも、

余、奥州に遊行して見るに、人風、古と異なる事なかるべし。羽州米沢のごときは、人国記に記す如し。<sup>9)</sup>

と賛意を表している。

ただし関西人の橋南谿は出羽に手厳しい。『東遊記』（序文・寛政七年＝一七九五年）の補遺・文書拭<sub>レ</sub>穢に、

日本の国にても西の方は文華也、東の方は野鄙也。殊に東北の国々は文筆一向に行はれず誠に無仏世界ともいふべし。

出羽に遊びし頃、彼地の風俗を見るに、物書きし手昏の反古、或は帳面の古き杯に人皆鼻をかみ厠に用ひて糞を拭ふ。甚しきは四書五経其外の書籍の古きにて肛門を拭ふに至る。誠に見るにしのびざる事也。身柄よき人までも多くはかくのごとし。西国にては日向など少し是に似たるにや。<sup>10)</sup>

と、出羽は文化果つる所であるとしている。他国の人はその国のすべてを見るわけではないので、好感の持てるものを見聞するか、たまたま嫌悪すべきものを目撃するかで印象が違ってくるのであろう。ただ出羽では精神文化より実用的な面が重んじられてかくあつたかとも思われる。なお『東遊記』は出羽国でも庄内地方の記事が多い。

さて諸国の話は『日本霊異記』以来奇談的な傾向がある。近世でも地方の奇談の伝統は続いた。井原西鶴の『日

本永代蔵」卷二・舟人馬方鏡屋の庭には、出羽の坂田（酒田）の米問屋鏡屋に集まる諸国の商人達が描かれており、賢い人々に関する世間咄が語られて、諸国話のネットワークが見られる。そして近世の出羽国にも奇談・怪談は多い。以下、これも箇条書きにして記す。

1 『曾呂利物語』卷三・二話・離魂と云ふ病ひの事（岩波文庫『江戸怪談集・中』）

出羽の国守の家で、ある夜妻が雪隠に行き、しばらくして帰ってまた寝た。しばらくたつてまた別の女が部屋に入ってきた。国守は不思議に思っ見ていた。ある者が「一人の女には不審がある」というので、よく調べて首を刎ねたが、人間であった。もう一人を切ったがこれも変化ではなかった。ある人が離魂という病だと言った。

2 鈴木正三『因果物語』（片仮名本）卷中・二十三話・幽霊来たりて子を産む事（同右）

出羽の山形で、商人が京都に上り、そこでもうけた女房を捨てて山形へ戻った。そこへ京の女房が尋ねてきたので、山形の女房を離婚し、京の女房と暮らして子が産まれた。商人が京都へ行き、妻の実家を尋ねると、その父は娘は三年前に死去したと告げる。商人が山形で親子三人暮らしていると言うと、父は喜んで山形にやって来た。しかし女房は父に会おうとしない。父が無理にその部屋に入ると、京都で立てた卒塔婆があった。

山形の富裕な商人で、紅花でも扱っていたのであろうか。京の女と故郷の女の二人妻の話は、狂言「墨塗」や御伽草子「さいき」等、室町時代の文芸でおなじみである。死んだ妻との交流は、東晋の怪談集『搜神記』など、中国によく見られる話である。

3 同書・卷下・三話・生きながら牛と成る僧の事

最上にある浄土寺の僧春也はいつも寝てばかりいて、ついに牛となった。旦那がやってくると、牛が衣を着て寝ている。不思議に思っ外で呼ぶと、僧の形で現われた。鳥居左京亮の時代である。

鳥居左京亮は忠政か忠恒か不明。忠政は元和八年（一六二二）山形に入部、忠恒は寛永十三年（一六三六）死去した。

4 同書・卷下・五話・僧の魂、蛇と成り物を守る事

最上伝正寺の蔵には大きな白蛇がいた。これは寺の長老で、蛇となって蔵の物を守っていたのであった。

5 同書・卷下・十四話・破戒の坊主、死して鯨となる事

最上川の下流坂田へ流れ込むあたりの磯部に鯨がやって来た。これは坂田の安隆寺という一向寺の坊主の生まれ変りで、彼は欲の深い破戒僧であった。破戒僧の因果応報譚である。

この『因果物語』は諸国話の性格が強い。たとえば「生きながら牛と成る僧の事」は、ほかに美濃、常陸、三河の話が集められている。

6 西村市郎右衛門『新御伽婢子』卷三・六話・夜陰の入道（天和三年〓一六八三年刊）（岩波文庫『江戸怪談集・下』）

最上の北寒河江の庄谷地の八幡宮に円福寺と城林坊があり、この間に堀があった。ここにある夜半、大きな法師の首が三つ現われた。これを見た者のうち小法師は絶命した。

近世における羽前の話は、まず日本海交通の要衝であった坂田（酒田）のそれが知られ、それから最上川沿いに内陸部に達した地の話が他国に知られるようになったのである。谷地（河北町）の八幡宮は源義家が後三年の役後、戦勝の神として創建したという由緒ある神社である。

7 神谷養勇軒『新著聞集』卷六・出羽霧山岳中大蛇（寛延二年〓一七四九年）（日本随筆大成第二期・第五卷）  
鳥居左京亮が山形を領していた頃、霧山に大蛇がいて祭られていた。

鳥居左京亮については、3の項目において記した。鳥居忠恒は三十三歳で死去し、その相続をめぐる問題が生じ、除封となった。鳥居左京亮の時代と断るのは、鳥居家の不幸の印象があるのであるうか。あるいは近世初期の山形にこのような怪異談があるのは、戦国時代の不安な世相がまだ続いていたからであろうか。なお先の『奥羽永慶軍記』にも怪異の話は散見する。東北地方全域に不穏な雰囲気あったことが感じられる。

8 同書・巻九・蛇を殺して忽ち死す

出羽の国の最上源五郎は、菩提寺竜門寺の鎮守が竜で、ある時鎮守の石垣の崩れにいた蛇を殺したところ、たちどころに死んだ。

9 根岸鎮衛『耳袋』巻九・親友の狐崇りを去りし工夫の事（文化十一年＝一八一四年）（東洋文庫）

米沢の家士の話。親友が妻を亡くし、家を訪ねると、その友には毎夜亡妻が現われ、自分の世話をするといい。家士は依然狐がこの親友をだますつもりだと話していたのを思いだし、狐のいたずらと思ひ、秘符を用いて退けた。これは最上川の源流のある内陸部の奥の話で、最上川沿いに伝わった話ではなく、陸地伝いに南下するルートで江戸へ伝わったものであろう。時期的に遅い記事であるのも注目される。

10 宮負定雄『奇談雑史』巻九・手之子大明神の事（安政三年＝一八五六年）（ちくま学芸文庫）

出羽国米沢領の手之子村に夫婦がいた。夫が遠くへ奉公に行くことになり、妻一人残すのを心配して、老人に同居を頼んだ。老人は毎夜妻の陰部に手のひらを当てて寝た。そのうちに妻は懐妊した。夫が不審に思ううちに、妻は出産し、六つの手を産んだ。人々はこれを神に祭り、手之子大明神とした。そのために村の名も手之子村となった。

宮負定雄は下総の国の人。手ノ子は現在西置賜郡飯豊町にある。米坂線に手ノ子駅がある。これは手ノ子という

村名が珍しくて起こった新しい縁起であろう。羽前の奇談はどうとう幕末に至って、米沢領の奥深い地まで対象となつたということである。

## 五 『中陵漫録』と置賜

さらに先述の佐藤中陵の『中陵漫録』に見える置賜の記事を見てみよう。佐藤中陵は江戸の本草家で、薬種物産を諸国に求めた。島津家、上杉家、水戸徳川家に用いられた。これも箇条書きに記す。本草家らしく、自然や風俗の記述が多いのが特色である。

### 1 卷一・三面山奇境

羽州米沢の北小国に採葉に行き、三面みおもてに至つた。桃源郷のような所であつた。

余六月至るに、男子は麻布かたびらの短衣はんでんを着し、女子は白布の脚布に紺の短衣にて、其髪は唐画の婦人の頭のごとし。世に見ざる珍しき髪なり。

と記し、そこは山深い秘境の地で、風俗も珍しいものであつたという。中陵はこの採取旅行が印象的であつたらしく、『中陵漫録』の巻一の冒頭にあげて、分量も多く載せている。

### 2 卷一・田舎の節事



諸国の年中行事についてはこのようにある。

余諸国に立て見るに、元旦の礼大抵相同じ。羽州米沢にては、正月十四日十五日の暮方より夜半まで、市家の児童五六輩群集して、家々を徘徊して餅を乞て戯る。是をさせごと云。また極窮なるものは、大人小児ともに、蓑笠を着して家々に行く。此者来ると皆水を掛る。其水を畏て、竿の端に小なる籠を付て、其中に餅を乞て徘徊す。田舎最多し。是をころくと云。又かせ鳥とも云。鳥のまねなりとも云。又同十四日の朝は、第一策を田中に植立て、同十五日の早旦に、自分の田中を徘徊して鳥を逐ふまねを為す。是を鳥逐と云。又城下の市中にては、十五日の早朝に新町と云処に於て、大繩を上下へと大勢にて引合、是を繩引と云。又萩村にては、娶て始ての正月十五日には、村中の人、手桶に水を持来て女婿むすめに灌ぎ、又賞伴とて、兩人赤体になりて、共に其水を灌る。是れは女婿に多く灌るを厭て出て助るなり。又七月七日には童子河水を沐する事、此日七度入る。何の由来ある事を未だしらず。

と記し、以下長崎などの例を示している。正月元旦の行事は諸国ほぼ似ているが、これは中央のやり方の影響があるのであろう。正月十四五日の小正月の行事が諸国によって特色があるようである。「させごと」は柳田国男編の『歳時習俗語彙』（国書刊行会、昭和十四年）では、耕馬の鼻を取る子、即ちサセトリのことかとする（『改訂綜合日本民俗語彙』（平凡社、昭和三十年～三十一年）も同様の説明である）。貧しい人々が蓑笠を着て異界の者となり、鳥の真似をして餅や銭をもらう習慣は全国的にあった。柳田国男監修の『民俗学辞典』（東京堂出版）には、「小正月の訪問者」の項目で説明されている。『日本国語大辞典』では、カセドリは鶏の鳴き声の真似という。水をかけるのは、正月の禊の意味であろう。ドイツでは十一月一日の万聖節に、シュトリーツェルという長いパンを焼き、子供が地域の貧しい人々に配る行事がある。またこの時代母・代父も堅信礼の少年・少女にパンを贈ると

いう。<sup>(1)</sup>

「鳥追」も『民俗学辞典』に小正月の行事として載っている。農作物に対する鳥の害のないことを望む予祝の行事である。「縄引」は『民俗学辞典』では「綱引」の項目で見える。年占すとしうちなわちその年の豊凶を占う行事で、小正月に多いとする。

荻村（現在は南陽市内）の新婚夫婦に対する正月の祝福もほかの地に例がある。水を浴びせるのは、これも禊の意味があるであろう。子供が七夕に川で水浴びをするのも、これと同様である。菅江真澄の紀行文に置賜地方は見えないので、こうした記事はそれを補う意味で貴重な民俗資料となっている。

### 3 卷一・町田の霊

羽州米沢の町田弥五郎は、常に阿弥陀仏を信仰し、毎日善勝寺に通っていた。老病にかかって床に伏してもやって来て、死んだ日にも来ていた。住持は霊が寺にやって来たことを知った。

これも米沢の奇談で、中陵は現地で聞いたのであろう。こうした怪談的なものには話の型がある。善勝寺は市内の大町三丁目にある。

### 4 卷三・異雞の談

禁忌の食物の話である。

羽州米沢某村に産る人は、皆雉子を食する事を得ず。若し誤て食すれば忽に腹痛すと云。薩州桜島の人も兎を食すれば忽に腹痛す。

諸国の食してはいけない食物の例をあげている。体に害があるためという。雉は昔よく食した食べ物的一种であ

るが、この村で禁忌となった理由は定かではない。動物崇拜と相まって、神職などが言い出したものであろうか。

5 卷三・天童山

著者は最上の天童山に行ったことがあり、

羽州最上の天童山は、危巖四方に環列して、その間に古樹蒼生す。真に深山大沢の趣有り。

と書き出している。

6 卷四・荷杖

夏に氷を売る話である。

羽州米沢にて毎年六月の朔には、田舎より氷を薦に包み負て数人来て鬻ぐ。此日より日々来て売る。手に二尺許の杖を持、休む時は其杖を其荷に立て腰を休む。

山陰に氷室を作り、冬に氷を作つて、夏に米沢で売り歩いたのであろう。猛暑の盆地なので、調法されたに違いない。氷の荷が重く、杖を用いて立ちながら休息しているさまが見えるようである。夏の風物だったのであろう。ただし中陵は親しく見たわけではないと断っている。

7 卷四・食虫

次は米沢地方でイナゴを食する話である。

虫を食物とする事なし。しかるに、米沢にてはイナゴを喰ふ。秋に至れば、イナゴを生にて売来る。…此国の人として食せざる者なし。又一村あり。水溝の中に黒き甲虫を生ず。此村中の人網して捕、一串に十頭を貫き、火に炙りて往來の人に売る。小兒の輩は皆好で食ふ。又希に蛇、蛙を食ふ人あれども、常に食する事なし。

この国の人は皆イナゴを食べるとある通り、今でも山形県内ではイナゴを食する。さらに蛇や蛙を食する話があるが、江戸の人からは奇異に見えたのであろう。

## 8 卷五・櫛葉

食物を何で包むかの説明である。

食物を包には竹荀の皮を用ゆ。肥前の魚店にては八角金盞ヤッヂの葉を用ゆ。羽州米沢の魚店にては、朴の木の葉を用ゆ。

とある。

## 9 卷八・吾妻山紀行

寛政五年（一七九三）四月十一日、中陵は置賜郡への旅に出かけた。北行して窪田、糠目、赤湯に達した。ここには四か所の湯があった。大湯・丹波・尼湯・森湯であった。中山に出て宿を取り、小滝、鮎貝、小出等に行き、米沢に帰った。五月十一日、今度は南行し、大沢、板屋、五色湯、姥湯、滑川、高湯などをまわった。二十六日には吾妻山の絶頂に登った。高湯は隣国に聞こえた温泉で、四方から来客があるとしている。中陵はこれに引き続いて、「高湯記」を漢文で記している。この山は衆山に秀で、羽州の名山である。村の名は白部というなどと記し、

たいそう気に入った様子である。

## 10 卷十一・萩村の婚姻

1に見える萩村の習俗である。中陵はここでよく採葉をしたのではないかと思われる。婚姻のしきたりは僻地によつてさまざまであると述べて、

羽州米沢の萩村にては、媒するもの、女の方に行て其女を請受て、先媒者の傍に臥しむる事三夜にして、餅を円く作りて百八、媒者、付負て女を連行き、其礼を調ふ。七日にして蒸飯を添て、父母の安を間に帰らしむ。此等の送迎は村中の少年五六人にて往還す。其婚姻の夜も、少年を遣て女の道具を負来しむ。其時に負来て土足にて上にあがり出んとす。是を其荷繩と共に忽に取らんと相争て、其荷繩を取らんとす。取を手柄とし、取れざるを手柄とす。何れにしても、酒肴を進て大に酔しむ。

これは村人同士の婚姻なのであろう。婚姻は村にとつて重要な儀式で、種々のしきたりが生じ、各村で特色あるものとなつたのであろう。

## 11 卷十一・敷島の螢火

中陵が米沢で諸子と一緒に一谿に至り、螢火を見物した記事である。数万の群光があり、「余、五十六国を周遊して、始て螢火の多き処を見る」と感激している。「敷島」は種々地名辞典を参照したが、まだ見出してはいない。

## 12 卷十一・土風

「土風」はその土地の風俗・習慣で、ここでは各地で詠まれた和歌を言っている。奥州や江州、筑紫等の例を示した後、羽州米沢で二百年前に流行したという歌をあげている。

地こぶてつぺんに星のおやぢがによつと出て火事の卵をふみつぶしけり

謎歌のようなものであるが、中陵の解によると、「地こぶ」は高山、「てつぺん」は峯、「星のおやぢ」は月、「火事の卵」は提燈のことという。中陵がいかに多方面にわたって地方の自然・文化に関心を持っていたかがわかる。

### 13 卷十一・百子沢の地陥

米沢の北郊に百子沢という所があり、小池があつて、池のほとりに墓碑があり、倒れて池中に入ろうとしていた。土人が言うには、昔長者に仕えていた髪長い下婢がおり、過ちを犯したため、主人が打ち殺そうとすると、女は池中に飛び込んで、主人家族を失せさせて、あたりを池にしようと言つた。その後その家族は途絶え、あたりはさらなる池となつた。墓碑はその家族の先祖のものである。

中陵は地勢を観察して、この池は陥没して皆池のようになったのであろう。百子沢という名が伝説に合っているとしている。明年四月さらに陥没が進み、農家も追々移転を始めた。越後に近い所で、そこからも見物に来たと記している。以下、日本各地の地面陥没の例をあげている。

### 14 卷十二・石敢当

米沢領内の石地藏についての苦言である。

羽州米沢の領内には、諸道の街に石地藏を置く。其像の首皆、折てなし。首あるは尤希なり。仙台の北郷には餓死供養と云石を立て祭る。他州の人に対して甚だ恥べきことなり。

米沢領内の石地蔵の首がなぜとれているのかは不明である。造り方に欠陥があったのであろうか。あるいは雪の害であろうか。中陵は恥ずかしいことだとしている。なお「石敢当」は『せきかんどう廣辞苑』によれば、沖繩や九州南部に見られる、道路のつきあたりなどに「石敢当」の三文字を刻した石碑で、このあとの文章にそのことが記されている。

15 卷十二・毒川の弁

六玉川の一つ高野山の玉川は、毒があつて人が飲むべきではないとし、

此川に似たる毒川、諸方にある者なり。羽州米沢下永井小松と云処の、若松観音の水常に出る。汲で飲む時は瘡かさりを病む。

とある。長崎の例も出しており、中陵の博識ぶりがうかがわれる。瘡はしかしマラリヤを指す。マラリヤと似た症状になるのであろうか。

16 卷十三・桃源

羽黒山では六月に桃花が深谷に咲くことを述べる。

17 卷十四・踏歌

踊り歌について述べたものである。踏歌は古代中国から日本に入った集団舞踊で、『源氏物語』初音の巻等々有名であるが、ここでは民謡の踊り歌を指しているようである。

予が四方に周遊して、其郷中の遊戯を見るに、相同して頗る異なる事多し。其土歌の詞も独吟じて楽しむべき者なし。しかれども、越後の甚九踊の如き盛なるはなし。此歌元来、長州赤間関の京屋の娘より大に盛に成たり。流行して羽州の米沢に入る。此歌を唱へ

ざる者なし。八十余歳の老翁も廁に入りて踊り歌ふ。如<sup>レ</sup>此盛なるに至て、官府より令下て大に禁ずと云。今に盛なるは越後の如きはなし。男女老弱相聚て足を踏て唱ひ、手を打て其節を正し声を助く。

中陵は民謡の歌詞は独り吟ずるに耐えずとしながらも、甚九節について、その盛んなるさまを伝える。越後より米沢に入ったというが、米沢領は隣国の越後から文化の影響を受けていたようである。甚九節が手拍子を用い、足を踏んで歌うため、踏歌としていているらしい。「此風盛都には人々好む者なし」とあり、地方のみの流行であつたようである。

『日本民謡辞典』（東京堂出版、昭和四十七年）では、「甚句（甚九）」は越後の石地浦の甚九なる者が大坂で金持ちとなり、遊女を身請けした際の二人のやりとりを歌謡にした。これが越後甚句の始まりであるという伝えがある。また「兵庫口説」の中に「長崎えびや甚九」というものがあつて、これも長崎の商人海老屋甚九郎が大坂で金持ちとなつて新町の遊女と契つたことを歌つていふという、等々の説明がある。中陵の歌謡に関する記事も、民俗学的な関心から来ているのであろう。長州の話も甚句伝説の一種をなしている。

#### 18 卷十四・猫話

猫に関する話である。

…羽州米沢より小国と云所に行く。皆山路にして三里の間に只茶店一軒あり。直に左右前後人倫なし。此茶店に猫あり。春に至て毎日山林に入て帰る。又数日にして帰る事あり。已に児を孕す。…



中陵の猫に対するやさしいまなざしを見ることができると。

以上をまとめると、調査旅行3例（1・5・9）、自然観察4例（11・13・15・16）、民間の行事・習俗3例（1・2・4）、風俗9例（1・6・7・8・10・12・14・17・18）、奇談2例（3・13）となる。置賜地方の習俗に関するものが多く、中陵の民間に対する好意的なまなざしを感じることができると。自然科学的な視点も興味深い。中陵は他国の場合と同様、好感を持ってこの地域に接したのではないかと思われる。山地の景色のすばらしさにも感動したらしい。諸国との比較の上に羽州置賜を観察するのが中陵らしい立場である。

ほかに羽前や置賜を記したものに、先の清河八郎の『西遊草』、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』などがある。

## 六 結び

置賜郡はしかし中陵が記したような、美しい自然や穏やかな世情ばかりがあったわけではなかった。明田鉄雄氏の『近世事件史年表』（雄山閣、平成五年）には、米沢領でもさまざまな出来事があったことが見えている。一揆は十一回、大火は四回、暴風雨・洪水が一回記される。置賜郡での事件は少なく、寛永五年（一六二八）十二月、米沢藩が甘粕右衛門ら切支丹三十人を処刑したこと、元禄四年（一六九二）十月、出羽亀岡村（山形県東置賜郡高畠町亀岡）の甚右衛門の下人彦作が主人の娘はる（十五歳）を絞殺して自殺した。その死体は磔となり、その父・兄等も死罪となったことが見える。羽前国全般に一揆は多かつたようで、これが不安のもっとも大きかつたことで

はないかと思われる。なお『米沢市史』近世編1・2は、米沢における災害について詳しく記している。

京都・大坂・江戸など、中央の記録は古くから多くあり、これらの地域に関しては豊富な知識を得ることができ、これに反して置賜郡のような地方は中央の記録に残ることが少なく、また現地の資料も乏しく、人々の生活の実態は古く遡るほどわかりにくい。この論考では中央の資料を用いたため、他国の人々がどのように羽前国・置賜郡を見たかの論が中心となったことをお断りしておく。

(注)

- (1) 日本思想大系『往生伝・法華験記』（岩波書店）による。
- (2) 同右
- (3) 新日本古典文学大系『今昔物語集・三』（岩波書店）二二四頁脚注
- (4) 新訂増補史籍集覧による。
- (5) 全集1による。
- (6) 『西遊草』（東洋文庫）二二二頁注
- (7) 『飛鳥井雅有日記』（古典文庫）による。
- (8) 岩波文庫による。
- (9) 日本随筆大成・第三期・第三卷による。
- (10) 東洋文庫による。
- (11) 植田重雄『ヨーロッパ歳時記』一九六・一九七頁（岩波新書、昭和五十八年）

本稿は平成二十七年三月二十五日、山形県南陽市中央公民館で行った講演をもとに執筆したものである。この時の題は「山形・置賜の歴史と文化―中央からのまなざし―」であった。